縄 文 時 代 前 期

木 村 鐵次郎

本県における縄文時代前期の調査は、県埋蔵文化財調査センター設立以前の県文化課によって大鰐町大平遺跡や碇ヶ関村大面遺跡、青森市熊沢遺跡など多くの調査例があり、膨大な資料を蓄積してきた。今回は、当センターが発足してからの20年間の調査を中心に、本県の縄文時代前期の発掘調査の成果を紹介していきたい。

竪穴住居跡

国道45号八戸北バイパス建設に先立って、昭和54年に県文化課が調査し、継続して昭和55年に当センターが調査した八戸市売場遺跡では、縄文前期初頭の長七谷地Ⅲ群期の住居跡３軒が検出された。平面形は不整円形（６ｍ×4.5ｍ、炉なし）及び楕円形（５ｍ×４ｍ、炉なし）であった。

国道338号仮設取付道路建設工事に先立ち、昭和58年に当センターが調査した六ヶ所村表館遺跡では、前期初頭の芦野Ⅰ群・表館式の隅丸不整長方形の住居跡１軒（３ｍ×2.7ｍ、炉なし）の検出をみている。この時期の住居跡としては初めての検出であった。

国道280号道路改良事業に先立ち、昭和59年に当センターが調査した平舘村間沢遺跡では、前期後葉の住居跡が２軒（１号3.4ｍ×3.5ｍ円形・地床炉、３号4.1ｍ×4.5ｍ円形・地床炉）検出された。特に第３号竪穴住居跡の床面から埋設土器が検出されたことは注目される。

むつ小川原開発事業に先立ち、昭和61年に県文化課が調査した六ヶ所村上尾駮（１）遺跡Ｃ地区では、前期後葉円筒下層ｄ１式の住居跡が17軒検出された。平面形は楕円形が多く、円形・長楕円形の例もあった。長径７ｍ～８ｍが最も多く、中には第８号住居跡のように長径が13ｍに及ぶ大型住居跡もみられた。

むつ小川原開発事業に先立ち、昭和60年と61年に当センターが調査した六ヶ所村上尾駮（２）遺跡では、前期初頭の早稲田６類期の住居跡が２軒(5.8ｍ×3.6ｍ、長方形・炉なし、3.7ｍ×2.7ｍ、不整円形・炉なし）検出された。早稲田６類期における住居跡の検出は県内で最初である。

津軽中部広域農道整備事業に先立ち、平成元年に当センターで調査した弘前市尾上山（３）遺跡では、前期後半の住居跡が２軒検出された。１軒は4.8ｍ×4.2ｍの不整な楕円形であった。

県営農免農道整備事業（高野川地区）に先立って、平成３年～４年に当センターが調査した川内町熊ヶ平遺跡では、前期の集落が検出された。前期の住居跡は12軒で、前期後半の円筒下層ｂ～ｃ式期が３軒（第８号・炉不明、第10号・砂敷炉、第14号・炉なし)、前期末の円筒下層ｄ１～ｄ２式期が９軒（第１号・炉なし、第２号・炉不明、第３号・地床炉、第５号・地床炉、第６号・地床炉、第９号・炉なし、第11号・炉なし、第12号・炉不明、第13号・炉不明）である。第10号竪穴住居跡では床を掘り込んで土器を埋設し、その上に石皿を裏返して蓋をしていたという。また、第10号・13号竪穴住居跡では、床に砂を敷いて炉として使用していた例がみられた。第３号竪穴住居跡の床面近くから検出された炭化物は、脂肪酸分析の結果、クリ・クルミ等の堅果類にキジ肉のような野鳥の肉を混ぜて焼いたクッキー状の食品炭化物と考えられている。

県総合運動公園整備事業に先立ち、平成４年～６年に当センターで調査した青森市三内丸山遺跡は、

縄文時代前期から中期にかけての、極めて多数の遺構と大量の遺物を出土したことで知られている。直接の発掘調査の原因となった運動公園整備事業は青森市の東部地区に場所を変えて行われることになり、三内丸山遺跡は保存されることとなった。その後の三内丸山遺跡の調査は、平成７年から県文化課三内丸山遺跡対策室に引き継がれている。住居跡の多くは中期の所産のものであるが、前期についても調査報告書で報告されている中では60軒弱の住居跡がある。内５軒は大型住居跡である。なお、三内丸山遺跡は、平成９年３月に国の史跡に指定された。

八戸平原開拓建設事業（世増ダム建設）に先立って、当センターが平成４年から断続的に調査を進めてきた南郷村畑内遺跡も、平成13年に調査完了の予定である。現在まで報告された住居跡は77軒であるが、そのうち前期の住居跡は40軒ほどである。内訳は前期初頭期が１軒で他はほとんどが前期後半代の円筒下層式の時期でもので、中でも後葉期のものが多いように思われる。第55ｃ号住居跡は前期中葉期の円筒下層ａ式期と思われる長軸13.3ｍ×短軸6.6ｍの長楕円形の大型住居跡であった。

国道101号道路改良事業に先立ち平成７年に当センターで調査した、深浦町津山遺跡では前期末葉を中心とする竪穴住居跡が10軒検出されている。形状の把握できるものでは、平面形は楕円形で地床炉を持つものが多く検出されている。

青森中核工業団地遊水池建設事業に先立って、平成10年に当センターが調査した青森市新町野遺跡では、縄文前期の住居跡が８軒検出され、そのうち４軒が大凡10ｍ以上の大型住居跡で注目された。第29号住居跡(10ｍ×9.2ｍ、隅丸方形、地床炉１、南壁際に長方形の土檀)、第30号住居跡(12ｍ×10ｍ、隅丸方形、地床炉３、南西隅に三日月状のテラス)、第31号住居跡(12ｍ×6.5、隅丸長方形、地床炉７、土器埋設炉２、南壁東側に出入り口状のテラス)、第35号住居跡(9.3ｍ×6.2ｍ、隅丸長方形、地床炉４）である。

青森市新町野遺跡の大型住居跡

土砂採取に先立って、昭和59年に東通村教育委員会が調査した東通村石持納屋遺跡では、縄文時代前期後葉から末葉頃の住居跡が５軒検出されている。平面形は楕円形・円形でテラスを伴い、炉は地床炉・竪穴炉・土器埋設炉がみられた。

藩境塚保全整備事業に先立って、野辺地町教育委員会が平成７年に調査した野辺地町柴崎（１）遺跡では、縄文前期中葉期の円筒下層ａ式を伴う住居跡が18軒検出された。炉は第１段階地床炉、第２段階皿形の浅い掘り込み炉、第３段階に円形の掘り込み炉への変化が認められたという。

縄文時代前期の竪穴住居跡の調査では、当センター設立以前はほとんど円筒下層式期のそれも下層ｂ式やｄ１式期の検出例であったが、ここ20年の成果としては、円筒下層式以前の前期前半の検出例がみられてきたことと、円筒下層式期でも大型住居跡の検出例が増加してきていることが注目される。三内丸山遺跡や畑内遺跡などの遺跡全般に及ぶ調査例から、集落の中での大型住居跡の性格が、

より明らかにされてくるものと思われる。

墓制

南郷村畑内遺跡第221号土坑

（１）フラスコ状土坑

南郷村畑内遺跡では、３基のフラスコ状土坑から人骨が出土した。第221号土坑から４体分の合葬された人骨が検出された。壮年期前半の男性２体、壮年期後半の女性１体、小児１体である。第251号土坑では小児１体、第257号土坑では成人女性１体である。その他に、第63号土坑から骨粉、歯、ベンガラ等が検出され、第232号土坑では底面からベンガラが検出されている。合わせて５基のフラスコ状土坑が墓に転用されたものと思われる。これらのフラスコ状土坑はいずれも前期後葉を中心とする時期の可能性が強いものである。

昭和57年に上北町教育委員会で調査した上北町古屋敷貝塚のフラスコ状土坑の第２号遺構からは、成人女性人骨が出土している。人骨の下にホタテ貝が敷かれ、土坑の上面には蓋をするようにホタテ貝で覆っていたという。

一般にフラスコ状土坑の性格としては、貯蔵穴と考えられている。ここで取り上げたのは、フラスコ状土坑の中から人骨あるいはベンガラ等が認められた例だけであるが、極めて少ないながらも墓として利用されたものがあることは明らかである。

（２）埋設土器

上北町古屋敷貝塚から円筒下層ｄ式の土器の中から胎児骨（妊娠後半期の７～８ヶ月）１体分が検出されている（注１）。

県道長平町・陸奥森田線道路改良工事に先立って、当センターが平成２年に調査した鰺ヶ沢町鳴沢遺跡では、前期末葉の円筒下層 d2式を主とする埋設土器が13基検出されている。正立と倒立の比率には差が認められないが、埋設土器の分布は地域的にまとまりを有している。

南郷村畑内遺跡では、縄文前期の埋設土器が59基報告されている。これらの分布はやや散漫ながらもいくつかのまとまりがみられ、墓域的な意識が感じられる。型式毎では下層ａ式５％、下層ｂ式12%、下層ｃ式７％、下層ｄ１式69%、下層ｄ２式７％で、下層各型式に認められるが圧倒的に下層ｄ１式が多いことがわかる。また、正立と倒立の別であるが、４：１の割合で正立が多くなっている。

縄文前期の遺跡から埋設土器が出土することはしばしば認められることである。その用途については、かって八戸市蟹沢遺跡出土の埋設土器から幼児骨が検出されたことから、幼児や小児の墓ではないかといわれてきたが、その後の人骨の検出例はない。しかし、南郷村畑内遺跡での埋設土器内の土壌の脂肪酸分析では①ヒト遺体を直接埋葬した例の脂肪と類似すること②ヒトの胎盤試料とも類似する例もみられる③土器の大きさから幼児埋葬用であった可能性が考えられると分析された。

鳴沢遺跡例での脂肪酸分析でも遺体や人骨の埋葬の可能性が指摘されている。

（注１）この胎児骨が入っていた土器について、この土器を取り上げた三沢市教育委員会田島氏に話を伺ったところ、この土器はフラスコ状土坑である第６号遺構の外の西にあり、埋設土器ではなかったかということであった。

南郷村畑内遺跡Ｂ捨場（西捨場）中掫浮石層直上からの下層ａ式土器と獣骨

その他

（１）中掫(ちゅうせり)浮石層の年代

十和田火山噴出の火山灰で代表的なものに中掫浮石層がある。中掫浮石は粒が細かく粟粒大のものの散布が広いのでアワズナの呼び名をされている。

中掫浮石層の降下年代は、かって縄文時代中期末と考えられてきた。しかし、昭和58年の十和田市明戸遺跡の調査で、中掫浮石層をきって円筒下層ｄ式土器が埋設されていたことから、中掫浮石層の年代は前期末の円筒下層ｄ式以前ということが判明した

さらに、平成４年の南郷村畑内遺跡における西捨て場の調査において、中掫浮石層の直上に円筒下層ａ式土器が出土することが確認され、中掫浮石層の年代は縄文時代前期中葉の円筒下層ａ式期の直前であることが明らかになった。

（２）捨て場

円筒土器文化の遺跡では、しばしば捨て場が形成され、そこから大量の遺物が出土することは知られている。当センターでも、前期の円筒下層式土器の捨て場をいくつか調査している。

国道280号（今別バイパス）道路改良工事に先立って、昭和55年当センターで調査した今別町山崎遺跡Ａ地区では、500㎡の捨場が斜面に検出され、出土土器は円筒下層ｂ式後半と下層ｃ式後半～ｄ１式という。

鰺ヶ沢町鳴沢遺跡では、円筒下層 d1式から d2式の捨て場が斜面に形成されていた。

川内町熊ヶ平遺跡では、二つの遺物密集ブロック（捨て場）から円筒下層ｂ式・ｃ式・ d1式・ d2式の土器と石器が捨て場から段ボール箱で500箱に出土した。捨て場は平坦面に形成されていた。

青森市三内丸山遺跡では、遺跡の北側斜面と谷部（通称北の谷）に前期の円筒下層式から中期の円筒上層式期の捨て場が形成されており、多量の遺物を出土している。特に通称第６鉄塔地区からは、捨て場下部の包含層（円筒下層ａ式・ｂ式期）が水分を多く含んでいるために、動物骨・魚骨・植物質の遺物が出土している。

南郷村畑内遺跡では、円筒下層式の捨て場が平場を取り囲むように形成されているが、中でもＢ捨て場（西捨て場）は遺跡北側の斜面に形成された円筒下層ａ式～ d2式までの捨て場であるが、包含層下部の円筒下層ａ式土器に伴う状況で、動物骨・魚骨が検出された。

当センター設立以前の県文化課調査でもいくつかの円筒下層式の捨て場が調査されているが、多くは円筒下層ｂ式あるいはｄ式の捨て場である。しかし、南郷村畑内遺跡と青森市三内丸山遺跡では円筒下層ａ式から捨て場が形成されており、大規模な捨て場は円筒文化の初期から形成されることが明らかとなっている。

（青森県埋蔵文化財調査センター調査第三課長）